

第2回

## 【実践編】

# 子育て支援実践事例

### 類型1 先駆的な実践活動の事例

(ミクロ・レベル：自園での取り組み)

### 類型2 地域との連携や協働の事例

(メゾ・レベル：自園と地域での取り組み、ネットワーク等)

### 類型3 自治体・地域との協働の事例

(マクロ・レベル：自治体との協働事業、子育て支援の組織化)

# 勝山保育園（山口県 下関市）

育児だヨ！全員集合

社会福祉法人勝山園 勝山保育園

副園長 中川 浩一



**〔所在地〕** 山口県下関市秋根新町12-12

**〔URL〕** <http://www1.ocn.ne.jp/~katuyama/>

**〔特 色〕** 新幹線の新下関駅から徒歩で5分、下関市内の中で比較的若い世代が多く、いわゆるベッドタウンで地域の4つの保育所はどこも定員を超えていました。

## 1. はじめに—子育て支援の組織化（仕掛け作り）

当園は、下関市を舞台として『育児だヨ！全員集合』を合言葉に、地域の中で、育児（子育て支援）に関わる人や場を増やすことに力点をおいた子育て支援に取り組んでいます。

日本の「子育て文化」は、地域や家庭の「人と人をつなぎあう心地よい空気」の中で脈々と続いてきました。しかし、1960年代から始まった高度経済成長により急激な都市化や核家族化が進行し、その空気が一気に薄くなりました。その影響は、子育てに限らず、無縁社会といわれるようなコミュニティーの崩壊へとつながっています。

そこで当園では、その地域の薄くなった空気を「子育て支援」で戻したいと考えました。「子育て支援」は老若男女だれでも関わることができます。もっとも身近な福祉施設である保育所が人と人をつなげ、人と人が支え合う地域を目指した「子育て支援」の取り組みを紹介します。

## 2. 支援者と支援者がつながる…「子どもなんでもネットワーク下関」

### (1) きっかけ

平成9年、下関市内の医療、保健、保育、教育、心理、文化といった「子ども」に関わる専

門家や子育て支援者同士が子ども達のあらゆる問題に対して、「何とかしたい」「みんなと連携していこう」との思いから「こどもなんでもネットワーク下関」を立ち上げました。当園は、このネットワークの発起人の一人で事務局をしています。

会員は、30団体65名（平成22年10月1日現在）で、小児科医・精神科医・大学教員（臨床心理学、保育学、児童文学）・幼小中高教諭・養護教諭・フリースクール運営者・子育て支援センター担当者・保育士・看護師・保健師・臨床心理士・栄養士・養護施設職員・指導員・児童相談所職員・子育て支援サークル代表・CAP下関・少年補導員・親業インストラクター等と多種多彩です。

## （2）内 容

基本活動は、月に1回の定例勉強会です。第2火曜日の19時から市内の公民館で開催しています。毎回の参加者は20～30名程度、毎月交替で自分の仕事の取り組みや現場での様子を報告し合います。また、もう一つの活動として年に1回「こどもフォーラム」を行っています。これは市内の大学や公共施設を会場にして、会員と学生ボランティアが企画はもちろん事前準備から当日の運営まで全て手作りで行うイベントです（過去10回）。

当初の目的はネットワークの存在を広く知ってもらうためでしたが、イベントを通じて会員同士が苦労を分かち合うことで、お互いの繋がりを深めるいい機会になりました。平成20年からは、こどもフォーラムと市のイベント（ちゃいるどフェスタ）が開催時期や参加対象も重なることから、市のイベントに出展団体の1つとしてコラボレーションしています。



定例勉強会

## （3）ネットワークの魅力とメリット

ネットワークの魅力は、①この町には素晴らしい人がたくさんいるという発見がある、②信頼できる誰かとたくさん知り合うことができる、③ネットワークの中で素晴らしい活動を見聞きしエンパワメントされる、という点にあります。仲間と一緒に子育てを応援しているという連帯感は、各自の取り組みにも大きな自信につながり、相互にいい影響を与えていると思います。

ネットワークのメリットは、自分だけでは背負えないような相談があると、ネットワークで知りあった専門家へ繋ぎ合います。その際、単なる窓口の紹介にとどまらず、知った名前と顔で紹介できます。紹介される側はもちろん紹介する側も安心です。

### 3. 地域と子どもをつなぐ…「チャイルドラインしものせき」の開設

#### (1) きっかけ

前述した「こどもなんでもネットワーク下関」の定例勉強会で、チャイルドラインの活動の紹介がありました。チャイルドラインとは18歳までの子どもの相談専用電話です。チャイルドラインの発祥はヨーロッパで、日本においては「せたがやチャイルドライン」が最初に誕生しました。現在は全国36都道府県で66のチャイルドライン（平成21年8月）が活動していますが、回線が足らずに子どもの声が十分つながっていないのが現状です。

そこで「こどもなんでもネットワーク下関」が母体となり、山口県内3番目となる「チャイルドラインしものせき」を立ち上げようと平成23年の5月の開設を目指し開設準備委員会を立ち上げることになりました。当園はこの準備委員会の事務局でもあります。

#### (2) 内容

平成22年5月～11月までに電話を受ける「受け手」ボランティアの養成講座を以下の10講座行いました。

養成講座1	チャイルドライン	上野和子	NPO法人 チャイルドライン支援センター 理事
養成講座2	メディアと子ども	古野陽一	NPO法人 子どもとメディア 常務理事
養成講座3	子どもたちの権利	広岡逸樹	児童養護施設 倭山湯の家 施設長
養成講座4	発達障害	金原洋治	山口県小児科医会 会長
養成講座5	子どもたちの性	野口真理子	NPO法人 女性ヘルプネットワーク 事務局長
養成講座6	不登校	石川 章	NPO法人 Nest 代表理事
養成講座7	児童虐待の現状	秋枝研二 富賀見紀子	こども家庭支援センター 紙風船 センター長 こども家庭支援センター 紙風船 臨床心理士
養成講座8	具体的な事例にみる子どもの問題	西村秀明	宇部フロンティア大学 人間社会学部 教授
養成講座9	具体的な事例からのロールプレイ		
養成講座10	傾聴の技法を学ぶ～ロールプレイ	上野和子	NPO法人 チャイルドライン支援センター 理事

養成講座の1～7までは公開講座として8～10は、実際にチャイルドラインの子どもの電話を受ける「受け手」希望者が受講する内容になっています。受講申込者は140名、実際にチャイルドラインに関わる人は50名程度の予定です。



養成講座の中のロールプレイ

### (3) 効 果

養成講座では毎回必ず記名のアンケートを採りました。その中に『毎回子どもたちの今の実態や現状、その背景を学ぶ中で、「子ども」という関心が自分の中で大きくなっています』とありました。養成講座受講者は、チャイルドラインに関わる人もいれば、直接的には関わらない人もいますが、地域の中で「子ども」のことを少しでも真剣に考えてもらえる人を増やせたと自負しています。

## 4. 地域と保育所をつなぐ! … 「地域保育ボランティア養成講座」の開催

### (1) きっかけ

平成23年度から下関市保育連盟（下関市内の公立23園 私立33園）は、「地域で多くの人に子育てに関わってもらいたい」との思いから「地域保育ボランティア」を設けることになりました。登録されると市内の保育所や子育て支援センターなどが活躍の場となります。将来的には自宅で子どもを預かることも想定しています。

そのきっかけとなったのは、平成21年の世界的大流行をみた新型インフルエンザです。下関市でも新型インフルエンザの影響で、その年の秋から翌年2月にかけて、市内の全保育所56園で111件の園閉鎖やクラス閉鎖がありました。当園も2度の流行の波がやってきてクラス閉鎖を余儀なくされました。保育所は、幼稚園と違って、保育に欠ける子どもを預かる福祉施設なので、保護者の中には仕事を休んでまで子どもを見ることができずに大変苦慮しました。そのことから、今後通常保育ができないような緊急事態の際、地域の中で保育士資格（保母）、看護師、保健師といった子どもに関する専門性をもち、しかも日常的に保育所や子ども達と関わっている人がいてくれたら、保育所も保護者も、子どもも大変安心できるのではと思い、「地域保育ボランティア」を考えました。そして平成22年度から「地域保育ボランティア養成講座 “ほぼ（保母）活（い）ける講座Ⅰ”」を企画し、全講座終了後に登録します。

### (2) 内 容

内容は4回講座で「保育について」・「子どもの発達」・「子どもの病気」・「地域力」といった子育て支援に大事と思われる4つの視点の講座を設けました。さらに有資格者だけではなく、



無資格者であっても、「地域の子ども達のために」と志のある人も講座を受けて登録してもらいます。希望があれば短期間（2～3日間）の保育実習もできます。

養成講座1	今どき保育～保育士国家資格の意味	寺田清美	東京成徳短期大学 教授
養成講座2	子どもの発達～子育て支援と臨床心理	馬場禮子	山梨英和大学教授
養成講座3	子どもの病気～保育士の基礎意識	金原洋治	山口県小児科医会 会長
養成講座4	子育て支援 地域力	山縣文治	大阪市立大学 教授

4回講座を受けた後、本人の希望により「地域保育ボランティア」に登録すれば、以下の活動が可能になります。

- ・地域の保育所でボランティアができる
- ・子育て支援センターやサークルのお手伝いができる
- ・将来的に緊急事態（新型インフルエンザのパンデミック時）の自宅保育
- ・保育所で働きやすくなる
- ・ファミリーサポートセンターのサポーターとしての活躍の場が広がる。

また、受講を受けてボランティアに登録されると次年度より年に1回～2回程度のフォローアップ研修と地域ごとの懇談会を行います。

### (3) 受講状況

現在（平成22年10月）120名、その内有資格者が30名、約4分の1でした。チラシ、ポスター、新聞記事、回覧板と広報した結果、非常に関心が高く大変好評でした。受講料は平成22年度の安心こども基金で全額補助を受けたので参加費は無料です。次年度以降は参加者にも費用を負担して頂くことも検討しています。



## 5. 地域と保育所をつなぐⅡ…「孫育て」の取り組み

### (1) きっかけ

子どもの発達に必要な経験の貧困化を解消するために今一番注目しているマンパワーは、「孫育て」の祖父母世代です。この世代は人生経験豊かで時間も豊富、さらに子どもとの相性も「今」を大事に生きているという点で共感度は抜群です。

下関市内で高齢者の子育て支援「孫育て」に取り組む「ボランティアほほえみ」の方とはネットワーク活動を通じて知り合いました。毎週地域の公民館で、祖父母世代の人たちによる若



い親子が遊びに来るサロンを展開しています。このサークルのモットーが「遠くの孫より地域の孫」ということで、その活動や思いに大変共感しました。

当園では毎秋、高齢者と子ども達の交流を図りたいと「おじいちゃん・おばあちゃん ふれ愛デー」という行事を行っています。元々は、在園児の祖父母を対象に開催していましたが、「ボランティアほほえみ」の影響により、在園児の祖父母だけではなく、地域のおじいちゃん、おばあちゃんを園にお招きする行事へと変わっていきました。

## (2) 内 容

2週間～1か月前に、ご近所の高齢者がおられるお宅へ、子ども達が散歩を兼ねて招待状をもって訪問します。子どもが順番で玄関の呼び鈴を鳴らします。家の中からおじいちゃん、おばあちゃんが出てきて、子ども達からの「まってま～す！」のメッセージと招待状を渡します。受け取るときの素敵な表情は毎回変わりません。当日は、芋掘り遠足、ふれあい遊び、おじいちゃんのハーモニカの伴奏に合わせてみんなで大合唱、豚汁パーティー、お芋掘りチャンピオン表彰式など、盛りだくさんの内容です。しかし園児達にとって、おじいちゃん、おばあちゃんとのお話の時間は何より新鮮です。また地域のおじいちゃん、おばあちゃんにとっても、自分の話に目を輝かせながら聞いてくる子ども達との関わりは、日ごろなかなか味わえない感覚を覚えるようです。また当日だけではなく後日、写真とお礼状をもって、子ども達と一緒にお散歩の時にお宅へ届けています。



## (3) 効 果

そんな中、平成22年8月8日「孫育て支援フォーラム2010」が開催されました。これは、「ボランティアほほえみ」と地元の大学教授が中心となって「祖父母の子育て研究会」を立ち上げて開催しました。内容は、午前中に岡山市の医療法人サン・クリニック院長の山縣威日先生の講演、午後からトーク＆トーク 孫育てフォーラム「遠くの孫より、地域の孫支援」～現場からの提言～と題して小児科の院長と私がパネリストで話題を提供しました。

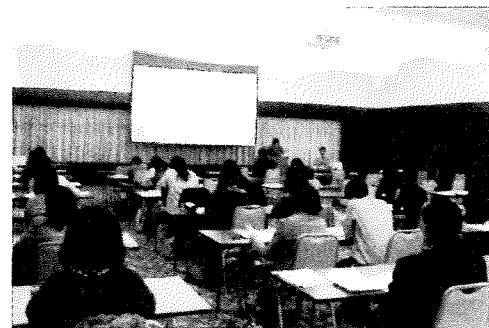
## 6. 支援センター同士をつなぐ…「山口県子育て支援センター連絡会」

### (1) きっかけ

平成5年度「保育所地域子育てモデル事業」を開始、山口県内で2カ園が事業をスタートしました。平成7年度にはモデル事業から正式に「地域子育て支援センター事業」として本格実

施、全国的に大きく拡がりをみせました。

山口県内でも徐々に実施園が増えつつあった平成9年度、情報が少ない中、不安を抱きながら手探り状態で子育て支援に取り組んでいたところ、センター同士の連携や情報交換の場が必要ではないかとの実施園からの声が高まって『山口県子育て支援センター連絡会』を立ち上げました。当支援センターは事務局をしています。



## (2) 内容

この連絡会は、山口県内の子育て支援事業（自主事業も含む）を実施する保育園等及びその従事者の相互交流をはかり、研修、研究により子育て支援事業の充実と発展をめざすことを目的としています。

内容は、①総会及び情報交換会と②研修会並びに見学会が主な活動です。この3年間の主な事業は以下のとおりです。

### 平成21年度 第2回子育て支援センター全国セミナー in 山口

総会並びに研修会『母子家庭の子育て支援』 山口県立大学教授 加登田恵子

平成20年度 研修会『子育て支援が保育を変える！地域を変える！』 大阪市立大学教授 山縣文治

平成19年度 総会並びに情報交換会『つどいの広場とは』 ホットサロン西門前てとてと代表 向井昌子

見学会 熊本県植木町（現：熊本市） 山東保育園・ばあちゃんち

また会費は1事業所年間10,000円です。総会・情報交換会・研修会等の参加費は年会費で賄っているので無料です。

## (3) 効果

毎回の講師を招いての研修会も大変好評ですが、総会や研修会で行われる、事例発表や少人数での情報交換会は大変有意義です。事例発表では、苦労しながら地域の実情にあった子育て支援をしている様子や、グループの情報交換会では、毎回手作りおもちゃや通信、パンフレットといったものを人数分持って来て取り組みを紹介し合っています。

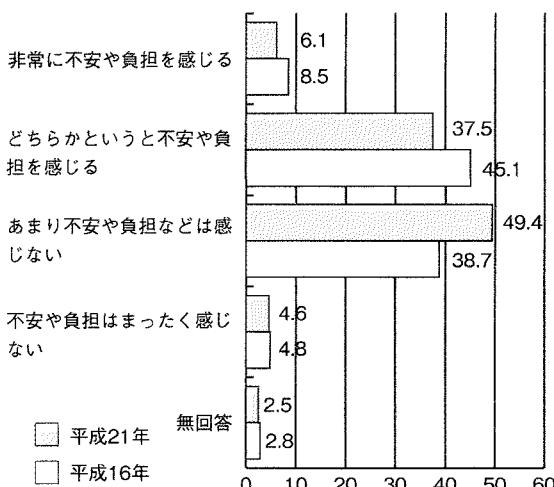
実は、保育と違って支援センターの担当職員はあまり園の内外で取り組みを話す機会がなく、聞いてもらいたいという欲求が満たされていないように思います。そういう意味から事例発表やグループの情報交換の時間をしっかり確保してあげることが大事だと思います。

## ア. 現段階の評価

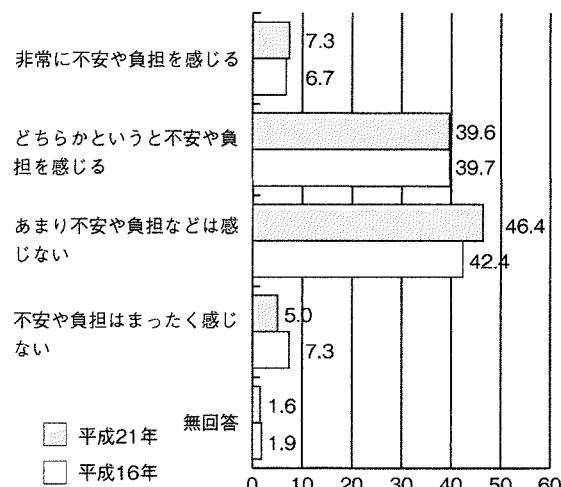
子育て支援が社会の中で取り上げられるようになって約20年、その中核を担ってきたのは地域の中でもっとも身近な子どもの施設である保育所です。しかし、これまで子育て支援の評価や検証、また質の高い子育て支援とはという議論はしてきませんでした。

そんな中、目に見える1つの評価となりうる参考データがありました。それは、子育て家庭を対象に実施した平成16年と平成21年のアンケートです。これは全ての自治体で義務づけられた「次世代育成支援行動計画」を平成17年の前期の行動計画、5年経過した平成22年の後期の行動計画を策定するために広く子育て中の保護者に対してリサーチしたもので、本来の使用目的とは違いますが支援者にとって5年間の子育て支援の施策や実践の結果によって子育て親子の実態がどう変わったのかが見て取れる貴重なデータだと思います。下関市のデータで説明したいと思います。

子育てに関する悩みや不安（就学前児童）



子育てに関する悩みや不安（小学校児童）



- ・平成16年・平成21年に市内に住む0歳児から小学校6年生までの子どもがいる家庭の中から無作為に抽出（注：下関市の場合は平成17年に1市4町が合併し中核都市へ）
- ・平成16年標本数 就学前2,000 小学校児童2,000 回収数 就学前1,136 小学校1,105
- ・平成21年標本数 就学前3,000 小学校児童3,000 回収数 就学前1,815 小学校1,837

このデータからは、子育て不安や悩みは、平成16年と平成21年を比較してみると、子育てに不安や負担を感じると答えた人が10%減少し、感じないと答えた人が10%増えています。このことから就学前児童やその保護者への子育て支援の方向性は間違っていないといえます。一方、小学校児童では、不安や負担を感じると答えた人と感じないと答えた人の差異はほとんど認められず、なぜ変わらなかったのか、また5年間の子育て支援の方向性は間違っていないかなどを検討する必要があるかもしれません。

## 8. 現段階の課題

「育児だヨ！全員集合」というテーマで地域を舞台に「子育て支援」の実践をしてきましたが、「子育て支援」の社会的認知度は、個々の支援実践だけではなかなか高めることができないことを実感します。これまで保育所型の子育て支援センターは、あまり自らの取り組みを外に向かってPRをしてこなかったと思います。これからは、「子育て支援」の重要性や有効性をいかに社会に向けて発信していくかが課題です。そのためにもできるだけ多くの人に子育て支援や保育に関わってもらい、関わった人たちの口コミ、また通信やパンフレットさらにインターネットなどを活用し、子育て支援の情報と共に利用者の声や子どもの姿、支援者としての充実感などを地域へ発信していけたらと考えています。そして子育て支援の実践の結果として客観的なデータに基づく地域の変化なども発信できたらと思います。

さらに子育て支援センターの全国組織の必要性を強く感じます。現在のような先進的に作られた県レベルでの子育て支援センターの連絡協議会だけでは、国や社会に向けてのアピール度が低く、今後は地域ごとに工夫すると共に、「質の高い子育て支援」を共有しながらレベルアップをしていけるような全国組織が必要だと思います。

これからも「子育て支援」をキーワードに地域の中で人と人をつなげ、人と人が支え合う地域を目指していきたいと思っています。

# 9

## 延岡子育て支援センター おやこの森（宮崎県 延岡市）

地域みんなで協働する子育て支援



延岡子育て支援センター おやこの森

木本 宗雄 杉の子保育園園長、延岡市法人立保育園協議会会長  
NPO法人延岡市子育て支援協議会理事長

〔所在地〕 宮崎県延岡市山月町1丁目4743

- 〔市委託事業〕
- ①地域子育て支援拠点事業（センター型）
  - ②病後児保育（定員4名）
  - ③ファミリーサポートセンター事業
  - ④家庭支援スタッフ訪問事業
  - ⑤まちなかキッズホーム（ひろば型・幸町 ココレッタ1階）

- 〔自主事業〕
- ①育児用品レンタル事業
  - ②保育サポーター派遣事業

### 〔沿革〕

おやこの森は、市内の民間保育園で組織している法人立保育園協議会（当時15園）が母体となり、平成12年3月に建設した子育て支援センターです。その後、平成16年度にボランティアの方の協力で保育サポーター派遣事業を始めました。平成17年にはファミリーサポートセンター事業の委託も受けました。また、平成21年10月からは、生活困窮家庭を対象にした家庭支援スタッフ訪問事業も始めています。

### 1. はじめに

延岡市は宮崎県北部に位置する人口13万人あまりの地方都市です。市内には現在、36箇所（公立9、私立27）の認可保育園があり、各保育園がそれぞれに多様な保育ニーズに対応しています。延岡市の保育園の特色は、地域の子育て支援には、各保育園における取組みのほかに、市

内の民間保育園で組織している法人立保育園協議会の中に子育て支援部会を設置（平成13年にNPO法人設立）し、地域住民や行政と連携・協働しながら取り組んでいることがあげられます。

以下に、①延岡の保育園が協同で取組んできた子育て支援活動の経緯、②ボランティアと協働する「おやこの森」の子育て支援、③行政との連携による子育て支援体制づくり、の三章に分け、その実践活動を紹介しながら、延岡の子育て支援体制の特色やこれから展望について述べます。

## 2. 保育園が協同で取組む子育て支援活動の経緯

### （1）3歳児健診時の育児相談

延岡市の保育園が地域の子育て支援に取組んだのは、昭和60年に乳児保育園が乳幼児健全育成相談事業の指定を受けて「育児相談」を始めたのが最初です。数年間は指定園だけでの活動でした。しかし、指定園のみの活動には限界があり、市内全体へはあまり広がりません。そこで、平成元年からは、民間保育園で組織している法人立保育園協議会の会長の保育園が指定を受け、市内の全保育園が協力して取組むように改善しました。各保育園における育児相談のほか、保健所とタイアップして3歳児健診にも相談員を交代で派遣するようにしたのです。少しずつですが、保育園の活動が地域の人々へ知られるようになりました。しかし、それでも相談者の多くは3歳児健診に来る人や保育園の保護者に限られていました。

### （2）大型店での子育て相談

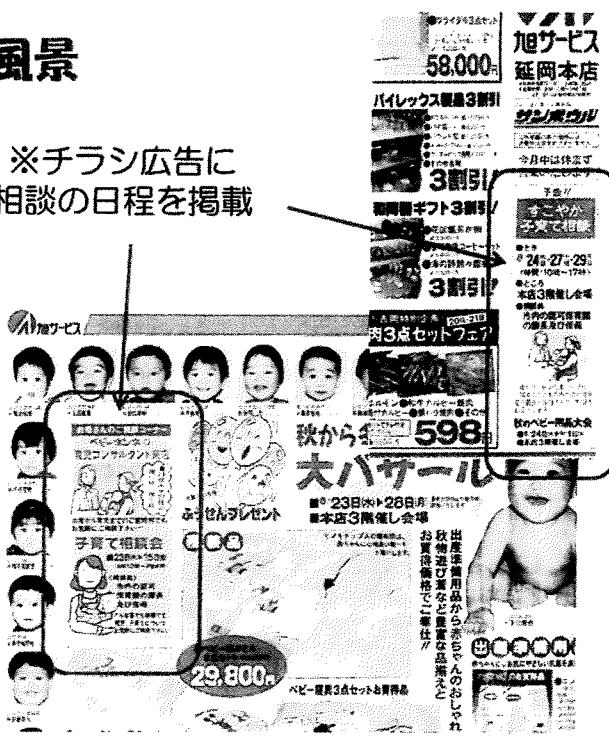
保育園の育児相談を市内全体へ周知するにはどうしたらよいか、法人園長会で議論を重ねました。その結果、相談者を待つのではなく、こちらから出向いて行こうという結論を得ました。こうして、平成6年6月から市内の大型小売店で、「すこやか子育て相談」の看板を掲げ育児相談を始めたのです。もちろん、育児相談の開始にあたっては、「保育に支障が出るのでは」とか、「保育者だけで対応できるだろうか」などの慎重な意見もありました。しかし、実際に始めてみると、園長や保育士で対応できる相談が殆どでした。大型店でも相談の実施日を廣告チラシに載せるなど、積極的な協力があり、保育園の育児相談が徐々に市民へ浸透していくようです。この大型店での育児相談は、平成16年で中止しましたが、その後は、幸町商店街の一角に出来た商業複合施設「ココレッタ」の中の「まちなかキッズホーム」で、集いの広場事業として相談事業を発展させながら現在も継続しています。

## 当時の広告と相談風景



市内のショッピングセンター（旭化成サービス本店）での開設  
当時のすこやか子育て相談

※チラシ広告に  
相談の日程を掲載



### (3) 育児相談から子育て支援へ

保育園が協同で取組む出前の育児相談が県からも評価され、平成7年に県のモデル事業の指定を受けました。モデル事業の指定により補助金が出るようになったので育児相談のほかに、育児情報紙（子育て通信・すこやかブック）の発行や育児講演会、育児セミナー、テレホンサービス、育児用品貸出しなど、次々に子育て支援のメニューを増やすことができました。現在、これらの事業の殆どは、後述するおやこの森の事業として、市内の公立保育所も含む全認可保育園・児童館の協力のもとに継続されています。

#### ① 子育て通信の発行

発 行 毎月1回・5,500部発行

配布先 市民（組回覧）、病院（小児科、産婦人科）、  
保育所、児童館、市役所、駅、民生児童委員  
など

#### ② すこやかブックの発刊

平成12年3月初版を発刊、以後2～3年毎に2,000部ずつ継続して発刊中

配布先～5ヶ月児健診時、各保育園、市役所（こども家庭課）、おやこの森など

#### ③ 育児テレホンサービス～毎週月曜日に更新、内容は子育て通信で周知

- ④ 育児用品レンタル～チャイルドシートや育児用品を随时に貸出し
- ⑤ イベントの開催～育児講演会、子育てフォーラム等を年に1回開催



#### (4) 子育て支援の拠点づくり

保健所や大型店での育児相談は、あくまでもその場限りのものです。もっと継続的な支援をするためには常設の相談所が望されます。また、子育て中の親や子供同士が自由に集えて遊べる場所の必要性も痛感しました。このような思いから、育児相談や子育て支援の拠点となる場所を探していました。幸いなことに、延岡市社会福祉協議会の別館に空き部屋の情報をキャッチしたのです。早速、借用を申し込んだところ、当方の趣旨を理解され無償で借りることが出来ました。平成9年5月に「すこやか子育てセンター」として開所しました。毎週月曜日から土曜日までの午前10時から午後3時までの開所時間で、電話や面接による育児相談を始めました。相談員には保育園を退職された園長先生や各保育園の主任保育士などが交代で対応しました。

この社会福祉協議会の別館で一年あまり活動していたところ、延岡市からも活動拠点の提供の話がありました。児童館跡の建物でかなり老朽化していましたが、少し修繕すれば十分使える物件です。早速、無償で譲り受けることにしました。このため、暫くは社会福祉協議会の別館（すこやかセンター）と児童館跡の建物（すこやかホーム）の二箇所で活動していました。



しかし、効率的な運営や将来性を考えると、社会福祉協議会の借間よりも戸外遊び場のある一戸建ての方が良いだろうと考えて、平成10年6月に活動拠点を一箇所に絞って山月町の児童館跡の建物に統合しました。

## 子育てのサロンです



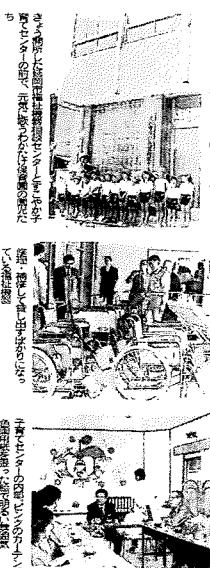
「おやこの森」の運営は、延岡市立保育園と民間の認可保育園、無認可保育園が共同で行なっています。運営組織は「おやこの森運営委員会」として、延岡市立保育園の役員会が中心となり、各園の園長会と連携して運営されています。運営組織は「おやこの森運営委員会」として、延岡市立保育園の役員会が中心となり、各園の園長会と連携して運営されています。

地元夕刊ディリ新聞記事（平成9年7月29日）

### 気軽に相談をするこやか子育てセンター

延岡市

## 福祉機器相談センター 同時開所 すこやか子育てセンター



地元夕刊ディリ新聞記事（平成9年7月29日）

機具の貸し出しや相談

延岡市

### （5）おやこの森の建設

児童館跡の建物を修繕しながら育児相談の場所や親子の遊び場として使用していたところ、少子化対策臨時特例交付金の話が舞い込んできました。少子化対策臨時特例交付金は全国で2千億円といわれていましたが、それぞれの市町村で様々な使われ方をしたようです。延岡市への交付額は約1億8千万円だったと聞いています。私立幼稚園と民間の認可保育園、無認可保育園に助成されました。認可保育園には総額で8千万円ほどの助成額です。そこで、この助成金で子育て支援拠点を建てかえようと法人立保育園の役員会で相談して、法人立保育園長会に提案しました。最初のうちは反対意見もありましたが、最終的には園長全員の賛同を得て改築が決定したのです。平成11年12月に着工し、平成12年3月に完成しました。名称も新たに市民から公募して「おやこの森」と命名しオープンしました。

- 敷 地 618m<sup>2</sup>
- 建 物 鉄骨ブロック造2階建て 1階 171m<sup>2</sup> 2階 108m<sup>2</sup> 延278m<sup>2</sup>

### 3. ボランティアと協働する「おやこの森」の子育て支援

#### （1）「おやこの森」の子育て支援の概要

おやこの森は、保育園が共同で設置した地域子育て支援センターです。しかし、地域子育て

支援センター事業は保育園等への委託事業のため、法人保育園協議会の会長の保育園が市から委託を受ける形で事業をスタートさせました。その後、平成13年にNPO法人を立ち上げて、職員の雇用形態や会計についても会長の保育園からほぼ分離させ、実質的には独立型に近い運営形態になっています。

おやこの森の活動は、子育て広場としてのセンターの開放、育児相談（面接、電話、訪問）、育児情報提供（子育て通信、すこやかブック、テレホンサービス）、子育てサークル支援（4サークル）、子育て講座などの通常メニューのほかに、育児用品の貸出し、保育サポーター派遣もしています。また、病後児保育、ファミリーサポートセンター事業の併設、商店街の中で集いの広場事業「まちなかキッズホーム」も委託されて運営しています。

[おやこの森]	○開所時間	病後児保育 午前7時から午後6時 子育て広場 午前8時30分から午後6時
	○休日	日曜日、祝祭日、年末年始（12月29日～1月3日）
[キッズホーム]	○開所時間	午前9時から午後6時
	○休日	年末年始（12月28日から1月3日）以外は全て開所

## (2) おやこの森の子育て広場

おやこの森の利用は、事前の登録も予約も必要なく、いつでも都合の良いときに来て自由に遊べます。また、カリキュラムもデイリープログラムありません。ただ、あるのはうっそうと茂った裏山と小さな砂場、そして少々の絵本だけです。もちろん、希望者にはボランティアの方による絵本の読み聞かせや赤ちゃん体操などもあります。また、おやこの森のスタッフが中心になって、毎月一回の育児用品フリーマーケット、夏場のそうめん流し、地域の人々を巻き込んだハロウィンパーティ、クリスマス会などのイベントも開催しています。希望者には年間8回ほど、子育て支援専門員による子育て講座も開講しています。毎日タイプの常連組から週1～2回利用の親子まで利用方法は様々ですが、毎月1千名以上の親子が訪れています。



ボランティアによる演奏会



育児用品フリーマーケット

**親子で楽しくフェス**

山下新天街で「きやかに」延岡

ボーリング・おひこどり・縄跳びが楽しめる

おやこの森の子育てサークル

**子育て&まちづくり**

商店街は大にぎわい

「今必要なのは人の力」

子育てフォーラムで意見交換

### (3) 子育てサークル支援

おやこの森は、サークル支援より個別支援に力を入れています。支援しているサークルは僅かに4つのサークルのみです。ただ、双子・三つ子の会や障害・病気を抱えている保護者の会など、特色のあるサークルを支援しているので市内に限らず県北一円の市町村から参加されています。

### (4) おやこの森の子育て相談

おやこの森には、子育てに関する相談が年間に800件から1,000件ほどあります。平成20年度の相談実績を見ますと全体で1,003件ありました。そのうち、電話相談が508件で全体の半分を占めています。ついで面接が338件です。そして、訪問相談が延べで157件ありました。ほとん

どの相談は悩みや訴えを聞いたり、助言をすることで解決しています。しかし、なかには相談だけでは解決しない事例があります。子供の急な発熱で助けを求める人、自分が病気になって子供の面倒を見て欲しいと訴えてくる人、稀には夫や祖父母との関係の調整を求めるような相談もあります。保育園や乳幼児健診時の相談に比べると深刻な相談や緊急性の高い相談が多いようです。

### (5) 保育サポーター派遣事業

前述したように育児相談だけでは解決せずに具体的な支援を求められるケースに遭遇することが時々あります。このような育児支援の要望には、最初の頃は高齢者世帯への在宅支援をしている団体の「あさがおの会」へ、ホームヘルパーの派遣をお願いしていました。しかし、他の機関への依頼では緊急時に直ぐ対応が出来ません。そこで、ボランティア養成講座を受講された方々のうち保育士等の資格を持っている方へ呼びかけて、保育サポーター派遣事業を自主事業として始めました。

保育サポーター派遣事業を始めた当初は保育園の一時保育より利用料金も高くなるので、利用者は限られた人々だろうと想定していました。ところが、いざスタートしてみると、予想していた以上に利用者がありました。多い月には60件を越す利用があります。現在、保育サポーターは、43名の方が登録され日々活動をお願いしています。派遣先としては、個人の自宅をはじめ、保育園や病院、講演会のイベント会場などに出かけています。平成21年度の活動実績は年間に1,375件の利用がありました。

この保育サポート派遣事業は後述するファミリーサポートセンター事業に統合しようと考えていました。ところが、ファミリーサポートセンター事業では対応できないケース（病児保育や夜間の利用）もあり、一つの事業に統合できないまま自主事業として、現在も継続しています。

### (6) ファミリーサポートセンター事業

延岡市のこども家庭課でも数年前から家庭支援の必要性は理解されていました。しかし、財政的に厳しい中での新規事業は財政当局の理解が得られずにファミリーサポートセンターの設



置は実現できなかったようです。ところが、自主事業ではじめた保育サポーター派遣事業の活動実績が追い風になって、平成17年からファミリーサポートセンターを実施することになりました。委託先には、当然のことながら保育サポーター派遣事業で活動実績のある「おやこの森」に決定されたのです。早速、ファミリーサポートセンター事業を既に実施していた宮崎市の視察や会員の募集に取りかかりました。

こうして、平成17年4月5日に宮崎県では2番目のファミリーサポートセンターを立ち上げました。現在、依頼会員が707名、援助会員が73名、両方会員が33名登録されています。平成21年度は3,031件の利用がありました。利用で一番多いのは保育園や幼稚園等の送迎で、次いで一時預かり保育、休日保育となっています。

延岡のファミリーサポートセンターの特色は利用規則を出来るだけ緩やかにしていることです。例えは、子供の保育場所は援助会員宅でも利用会員宅でも、あるいは「おやこの森」でもよく、双方の合意で決めるようにしています。このような柔軟なシステムが良かったのか、平均すると毎月300件ほどの利用があります。

このファミリーサポートセンター事業には三つの優れた特色があります。第一の特色は支援する人と支援を受ける人が固定していないということです。支えられていた人が支える側になってくれることがよく見受けられます。ここが保育園の保育と大きく違う点です。第二の特色として、地域の絆を強める働きがあります。援助会員と利用会員が台風などの災害発生時、協力し合うなどの姿も見られるようになりました。第三の特色は、保育をする子供に1対1でかかわることです。個別的対応の必要な乳児には、特に望ましいシステムだと思います。現在、問題となっている保育園の待機児童問題にもファミリーサポートセンター事業や保育サポーター等の活用が一つの解決策になるのではないかと思われます。



延岡市

## 4. 行政と連携する子育て支援体制づくり

### (1) 子育て相談での連携

行政との連携の始まりは、平成元年に保健所の3歳児健診時の育児相談が最初でした。

その後、母子保健業務の市への移管とともに、市の健康増進課へ相談場所を移して継続しています。現在、乳児健診時には、おやこの森の保育士が、1歳6ヶ月健診と、3歳児健診時には、公私立保育園の保育士が交代で子育て相談にあたっています。

健診時の育児相談はそんなに多くはありません。相談は毎回2～3件程度です。育児相談よりも子育て情報の提供の場として活用しています。おやこの森が担当する乳児健診時には受診する全ての家庭へ毎回50～60冊ほどの「すこやかブック」を無償で配布しています。

### (2) 子育て支援アドバイザー事業の創設

園長や主任保育士クラスの職員は保育園から出向いて地域活動をする機会が増えてきました。その際、保育園の地域活動が円滑に行えて効果をあげるために、活動する職員に対して何らかの身分を保証することも重要です。そこで、市役所と相談し子育て支援を担当する保育士に対し、市長から子育て支援アドバイザーの証票を交付してもらう制度を設けました。この制度は保育所地域活動事業の中の一つの事業として位置づけられています。

前述した乳幼児健診時にもアドバイザーの指定を受けている保育士が出向いています。ファミリーサポートセンターの会員養成講座や保育サポーターの研修会などの講師にも子育て支援アドバイザーの方にお願いしています。また、保育園によっては、定期的に公民館や児童公園に出向いて独自の子育て支援活動をしている子育て支援アドバイザーも数多くいます。このほかにも、各保育園には、主任児童委員や母子保健推進委員の委嘱を受けて勤務時間外に地域活動をしている保育士も見られます。



### (3) 家庭支援スタッフ訪問事業の創設

保育サポーター派遣事業やファミリーサポートセンター事業は乳幼児を抱える家庭への個別的支援が出来る点では素晴らしい制度です。しかし低料金とはいえ、時間数や日数が増えてくると相当な利用料金になります。支援を求めてくる家庭に限って経済的にも困窮している家庭が多いのが現状です。利用料が払えずに個別的な家庭支援が必要な時は、おやこの森の職員で対応するようにしていました。しかし、職員数もぎりぎりの状態であり、根本的な解決策にはなりません。このような家庭支援の必要性については行政の方にも逐一伝えていました。しかし、財政事情の厳しい地方の自治体では独自事業への予算化は厳しい状況でした。

ところが、平成20年度の補正予算で都道府県へ交付金が配布され「安心こども基金」が創設されました。この「安心こども基金」を使った地域子育て創生事業のメニューの一つに家庭支援スタッフ訪問事業がありました。延岡市ではさっそく、この事業に取組むことになりました。現在のところ、この事業に取り組んでいるのは県内では延岡市だけのようです。平成21年度の下期から、おやこの森で家庭支援スタッフ訪問事業の委託を受けました。この家庭支援スタッフ訪問事業とファミリーサポートセンター事業、保育サポーター派遣事業の三つの事業を組み合わせることによって、子育て家庭への支援事業を充実させることができました。これも職員やボランティアの方と連携して先駆的に取組んできた成果だと思います。

### (4) 要保護児童対策協議会への参加

平成16年度の児童福祉法の改正で市町村が児童家庭相談の窓口になり、市町村に要保護児童対策地域協議会が設置されました。子育て支援センター「おやこの森」も構成メンバーの一員に加えてもらっています。最初の頃は代表者会議が年に1回程度開催されて現状報告がされる程度でした。ところが、数年前から担当者会議やケース会議が頻繁に開催されるようになり、行政との連携が密になってきています。

電話相談や家庭訪問等で子育て困難家庭を発見したら直ぐに市へ連絡します。市ではとりあえず緊急避難的な対応を取ります。その後、関係者によるケース会議が開催され、本格的な支援活動が始まります。この連携活動の中で活躍してくれているのが家庭支援スタッフの方々です。

## 5. 子育て支援事業の総括とこれからの展開

延岡市の保育園では、「一つの保育園の百歩よりも皆の保育園の一歩」を合言葉に地域の子育て支援に取組んできました。平成元年から始めた乳幼児健診時の育児相談も22年目になります。平成8年に創刊した子育て通信も平成23年1月で186号を数えます。育児情報紙「すこやかブック」も近日中に6刷目を発刊する予定です。一つの保育園では果たして、こんなに長期

間にわたり市内全域に対して発信を続けることが出来たでしょうか。まさに、全保育園の一致協力した取り組みの成果ではないかと思います。

一方、地域子育て支援センターは厚生労働省の通達「特別保育事業実施について」に基づく施設です。従って、保育所等に併設の支援センターが殆どです。「おやこの森」のように、地域の保育園が共同で設置した単独型の支援センターはあまり聞きません。併設型と単独型には一長一短がありますが、単独型の支援センターは、保育園本体とは無関係に子育て支援センター事業に専念できるというメリットがあります。利用者の方からも気兼ねなく利用できるとの評価を受けています。ただ、おやこの森はすべて委託事業や自主事業だけなので、資金繰りには大変苦労しています。自主財源確保の道も考えながら職員の処遇向上を図ることも大きな課題です。

それから、おやこの森の大きな特徴の一つに保育サポーター派遣事業とファミリーサポートセンター事業を併設していることが挙げられます。育児相談だけに終わらずに必要な方には援助会員や保育サポーターの支援ができます。これが「おやこの森」の大きな強みです。しかも、生活困窮家庭には、行政との連携の中から、「家庭支援スタッフ制度」を創設できたことで、全ての家庭への支援体制が出来ました。

厳しい財政の中で行政の財布の紐を解くことは極めて至難なことです。単なる要望だけでは実現しません。先駆的に汗をかきながら実情を訴えつつ、前向きに提案をすることが重要です。これまで子育て支援活動を通して、このことを強く実感しています。

これからの子育て支援活動としては、「親」への子育て支援に留まらず、子供達一人ひとりの「育ち」への支援を視野に入れています。つまり、子育て支援対象を学童まで広げ、「人づくり」に力を入れて行こうと考えています。こうなると、現在のおやこの森では、施設的規模的にも場所的にも限界です。子育て支援センターと児童センターを合体させたようなワンランクアップした総合的な子育て支援の拠点づくりが当面の目標です。地域のみんなと協働しながら、何としてもこの夢を実現させようと考えているところです。

